

This document is made available through the declassification efforts
and research of John Greenwald, Jr., creator of:

The Black Vault

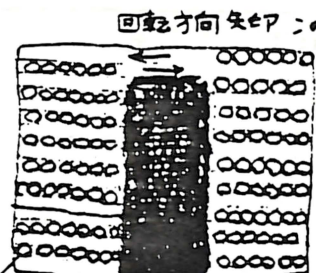
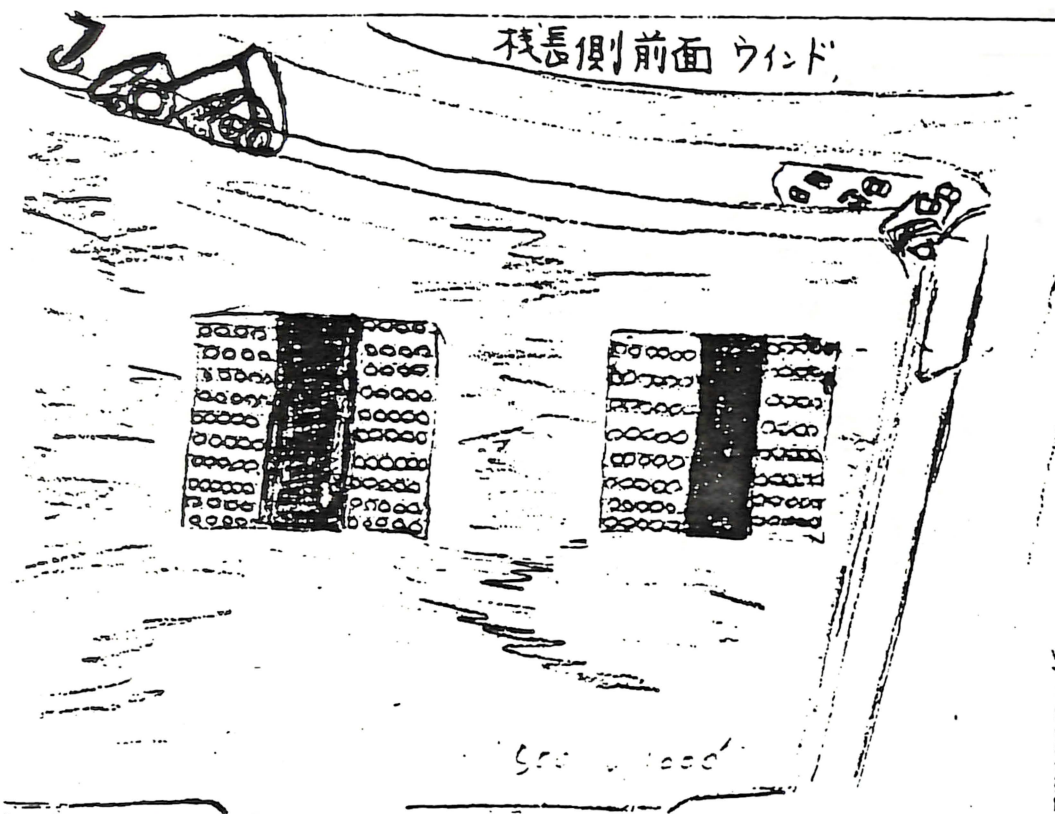


The Black Vault is the largest online Freedom of Information Act (FOIA)
document clearinghouse in the world. The research efforts here are
responsible for the declassification of MILLIONS of pages
released by the U.S. Government & Military.

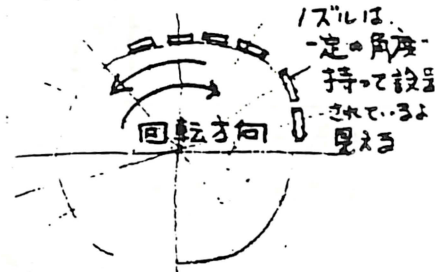
Discover the Truth at: <http://www.theblackvault.com>



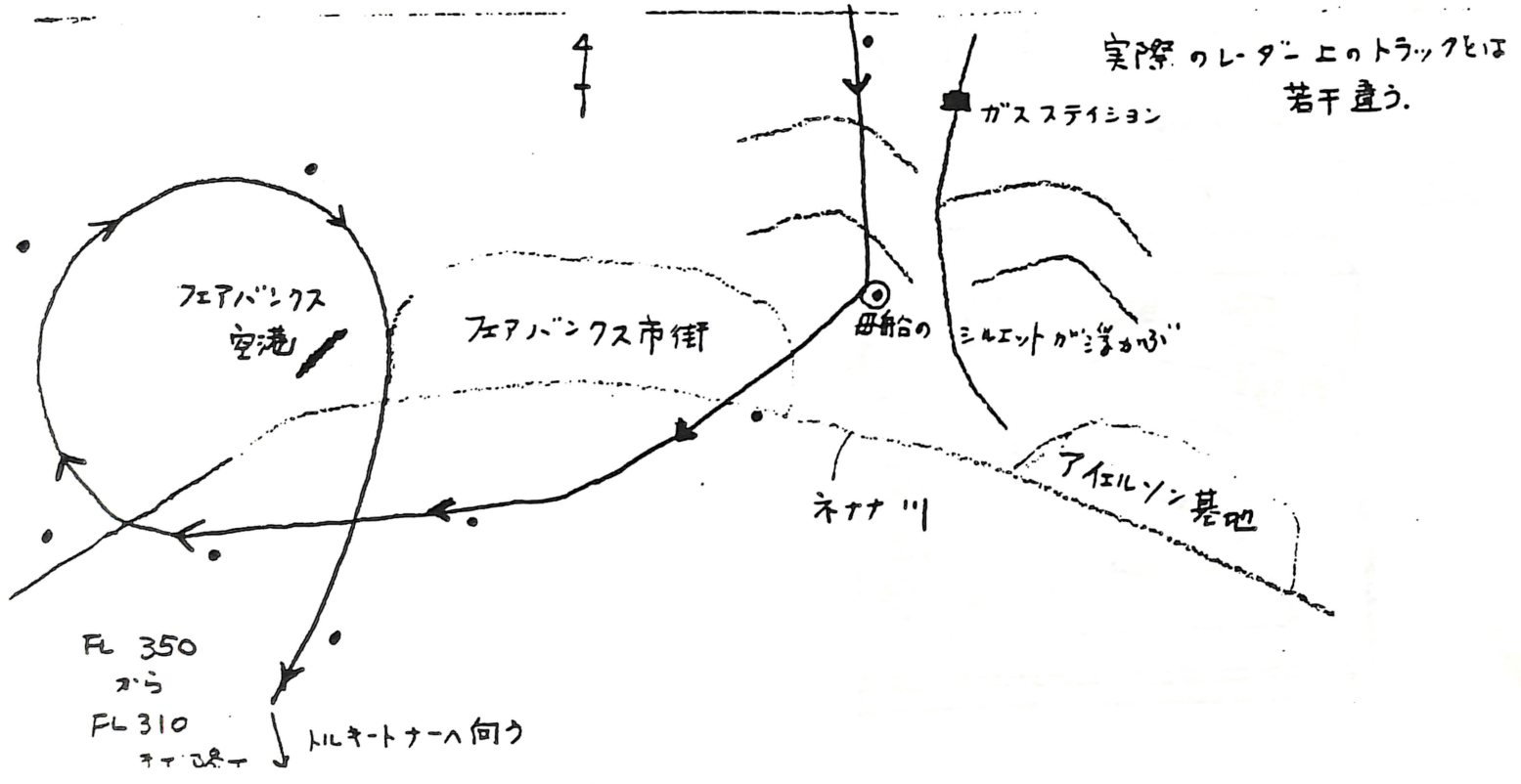
JAL AIR LINES
 DISTRICT OFFICE OF OPERATIONS
 ANCHORAGE INTERNATIONAL AIRPORT
 P.O. BOX 190048
 ANCHORAGE, ALASKA 99519-0048
 PHONE: (907) 243-3164



回転方向矢印この方向に見える
 排気口 中央黒色部に炭火の
 飛びはねる感じあり
 固定ではなくバリアブルコントロール
 されている感じ



光について。噴射方向の光は見えるが、ノズルが横を向くと全ク見えなくなる
 シェットエンジンのアフターバーナ使用中は明るく、まわりがぼんやり
 見えるようになるが、全く本体は光にあては浮かびあがらなかった。
 正面を向いている排気口は、常時アンバー色の光をばらばらに
 出している

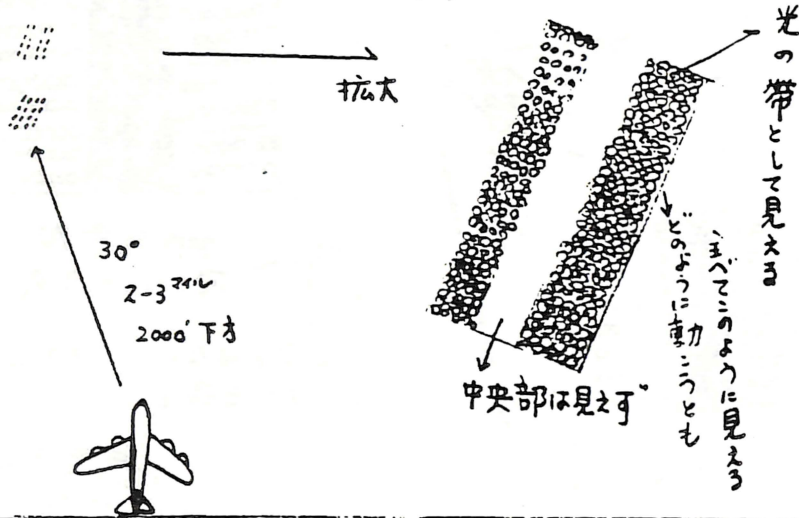




JAL AIR LINES
 DISTRICT OFFICE OF OPERATIONS
 ANCHORAGE INTERNATIONAL AIRPORT
 P.O. BOX 190048
 ANCHORAGE, ALASKA 99519-0048
 PHONE: (907) 243-3164

最初に灯火を発見

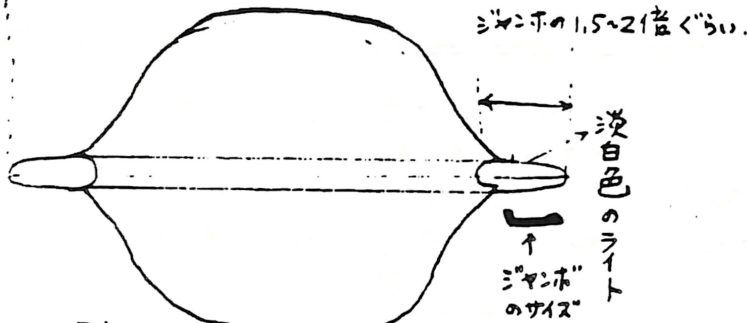
ヘアクリップのような
長方形のスタイルをしている



他の灯火により浮かび上がった
母船のシルエット

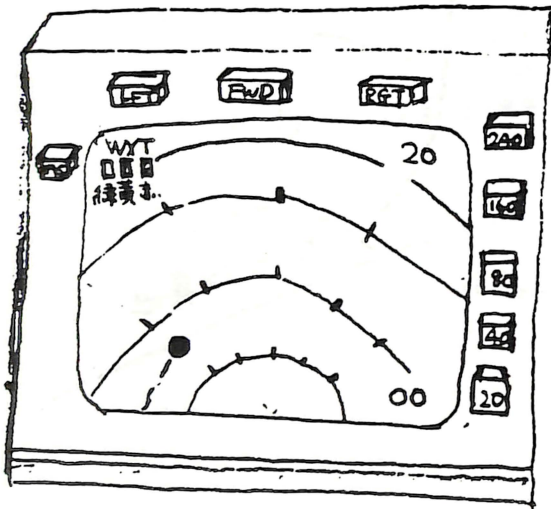
航空母艦の艦橋のサイズ

淡白色のライト



どの角度から見ても我々に見える ライトの
間隔は同じであった。どの角度から
左右のライトは見えたり。

デジタル WX レーダーで補足した時の図



レンジ 20 マイル

テルト 0°

7-8 マイルに
ターゲット
緑色の円

未来との出会い

PSS 異月 寺内謙寿

ひと昔前、例えは「縄文時代」に、ヒトリの狩人が、山中で、
 5 現在、一般に使われているテレビに出会ったとしたら、仲間
 ひとと説明するであろう。多分、誰にも理解されず、
 神様の前に仲間を連れられて行き、御祓いを受けこ
 10 られ、清められることであろう。
 そんな出会いにあってはったのである。

15 アラスカ半島の北岸では、11月後半になると、日中
 でも太陽が見られなくなる、極地を通過するエアール
 の下方では、本格的な冬を迎え、年明け^る3月頃までは
 20 暗闇がこの地を支配する。そんなある日、1986年11月
 17日、アイスランドのケフラビック国際空港を出発し、北極
 25 ルトを経由してアラスカ州アンクラレッジ国際空港へ出発した。
 日本航空 B747 ジェット貨物便 JL1628便が、アラスカ
 半島上空で、約50分をわたり、小型宇宙船2隻及び
 30 大型宇宙母艦1隻の異常に近距離までの接近を受け、
 被害、危害は受けなかったが、人間の科学では
 GA-02578 安全運航の祈りをこめて

理解出来ない事柄が多々見られたので、順を追って記録

を北にある。

10月も半ば頃には、友人から特別便の締成を聞き、少なからず

喜んで、我が仲間うちの気負として、新型機、新型の機器

オフライン空港の使用など、常とは変わった事に大いに興味をそとられる

1 定年を控えた機長が新型機の訓練に移行させてもらえないと

ホヤクのものもその典形でもある、立場が同じならば私も変わらない

1 1 ありである。

今回の特別便は、フランス産ワイン、86年度産出のジョシヨレ

ヌーボーの大量輸送が任務である。

担当区間はアイスランドからアンカレッジ迄の2967哩

約5500kmの距離で、約6時間20分の飛行が

2 予定されていた。北極ルート通常の飛行に比べて、飛行

時間が2/3という、比較的に短いフライトである。

日航機のケフラビック空港への着港は過去2回あり

3 旅客の客体の急激な悪化など緊急時のみであった。

ヨーロッパへの往き帰りに、遠く氷河に輝く、アイスランドの

山波も横目にとらえながら、通過するのが常であった。

去る10月に行なわれた、米ソ主脳会談会場のある

ライキアビックは50km東側に位置し、乗用車で45分の
距離にある。

今回のフライトの目的は、パリからアンカレッジへ直行するよりも

途中で「アイスランド」へ寄港した方が、貨物の搭載量を増やす事が
出来るため計画されたものである。

しかしながら冬期であるために、滑走路の表面が氷で覆われ
てもすれば、離陸性能に影響を及ぼすため、せっかくハリから
空輸してきた貨物の一部を取り下す可状況になりかねない。

天候の変化には、ロンドン空港支店より同行のティスハッチャー松田氏

マネージャー蒲地^{カモ}課長、整備担当の松本氏など、非常に気と配り

貨物の搭載量の決定について、ロンドンよりハリと連絡が
繁雑に行なわれていた。

NATO海軍基地も併設されているケラロビック空港の11月の

平均気温は北緯64°(左アバックス市附近)に位置する

と3としては最高3℃最低-0.3℃と暖かく

メキシコ暖流の影響は大きい。

ファーストオフィサーの芳藤氏、航空機関士の佃氏と、総勢6名の
日航マンが真夜中の12時に、小雨まじりのケフラビック空港に
到着した。到着後、早々に受け入れ体制を整えるために、3名の方の
活動が始まった。真夜中には、しかも、他社の施設を借りての作業で
ある。いつも熱い思いで頭が下がる。

我々は港町に面した住宅街の中にある、室数8つほどの
新築したばかりのホテルへ向うた。

アイスランドは温泉国、豊富な温泉水を暖房に利用しており
境内は暖かく快適であったが、ベットの狭いのは驚いた。

テンマ-7の羽先布因が巾135cmである理由がわかったような
気がする。約17時間ほどの滞在である。

心配していた天候も、幸運なことに朝方には回復し
日中には太陽も顔とのかせ、折りからの名物の強い北東風
と3℃前後の気温に助けられ、滑走路も凍ることはなく

充分なる準備と余裕を持って、3名の日航マンの見送るなか

に20時42分に特別機はケフラビック空港を後にした。

我々の取った飛行コースは、グリーンランド南東部より、大氷高原のグリーンランドを横切り、グリーンランド中部西岸に位置する米軍基地のあるチュレハと直行のコースを取った。

グリーンランド上空の飛行は、月も満月に近く、右前方上空にあり、夜間飛行としては、視界も広く開いて良好ではあったが、しかしながら気流が不定定で、2時間ぐらひ揺れに揺れたが、旅客便の厳しさを思うと、比較的、気疲れせず、すみずみすみずみ調なフライトではあった。

チュレハを過ぎた後、北極海航空路シエラにシテ、カナダ領極地北部と南西下しカナダ北岸のシングルポイントを目指した。

カナダ領シングルポイント(北緯68度55分西経137度15分)上空で、エドモントンセンターに位置通報を行なったのか、アラスカ時間で午後4時52分頃であった。

月も真後にまわり、水平線近くにあるせいか、周囲は、すっかり漆黒の闇と化していた。

エドモントンセンターからは、アラスカ領空へ移行する地臭

ポットで"アンカレッジ"センターとコンタクトせよとの指示を受けた、

ポットはアンカレッジの北北東約480海里約890^{km}の位置にあり

北緯67度56分 西経141度がその地点である

午後5時5分31に、アンカレッジ"センターと交信が開始された。

事前に承認を受けている我々の飛行コースは、シット529で

オトユ-コンへ直行で"ネナナへシット125で"トルキートナ、テイガー

経由アンカレッジというコースである。

アンカレッジ"センターは、トランスポンダーコード(識別番号)を

指示すると同時に、我々のレダースコープを補足し、トルキートナ

への直行を指示してきた。

指示に従って直行コースを取るために、左旋回を開始した。

異変はその直後に発生したのである

旋回方向に何かわからぬが"光がある、トルキートナへ向けて。

針路を決定し水平飛行に移ると、30度左前方、下方約2000^{ft}

(600m)に航空機の灯火らしきものがあり、我々と同方向、同速度

で移動している。我々の高度は35,000^{ft}(10,600m)速度は

900^{Km/h}から910^{Km/h}であった。

通信の傍受の段階でも、目視の段階でも、今まで発見して
いなかったのも、特別任務の軍用機か、2機の戦闘機
ではないかと、あまり気にとめなかった。数分経過したか、依然として
その位置は変わらない。気になりだした頃合には、警備ファーストアササーが
確認のためにアンカレッジセンターを呼び出した、我々の近くを
飛行している航空機の情報を知らせよ、アンカレッジセンター
からは、北部空域ではほかの航空機はいないとの回答が来た。
みり返し、我々は航空機の灯火を目視していると報じた。
しばらくしてから、軍関係の航空機もない、又地上のレーダーにも
我々の機影以外はないと再度知らせて来た。
又、飛行高度付近に雲はないかと、数度、質問して来た。
下方の山合いに、ほり着くような、まぼろしな雲があるだけで、中層
高層にも雲はなく、気流も安定していて、至極めて快適な
状況であった。
どうもレーザー光線の発達に伴って、雲を利用して影像を捕ま、
それらしい動きをさせることが多くなっているらしい、99分コントローラーは
その事を心配しているのかも知れない。

極地のツンドラ地帯まで来たのレーザー実験などあるまいかと

考えながら左前下方を行く灯火を見守った。

どうも2つの灯火の動きが、通常考えられる航空機の動きと異なる

2匹の子熊がしゃべっているように動き出した。

距離は十分に離れているし動きも大きくなく危険も感じられ

ぬいたため直行コースにシフトして南下を続けた。

もしかして、UFOと言われるものかも知れないから、写真にでも

撮っておけば、後でわかるかも知れないと、コックピット後部に置い

ていたカメラバックを持って来てもらい撮影に入った。依然として

状況は変わらないが、灯火は異常な動きを示している

風景写真と主に撮影のためはASA100のフィルムを使用、オートフォーカス

で目標に合わせたが、焦点が合わず、レンズは伸縮をくり返す。

オートフォーカスをマニュアルに変え、シャッターボタンを押し続けたが、なかなか

今度はシャッターが閉まらない。そのうち飛行機も微妙に

揺れ出し全く撮影についてはあきらめ、カメラを4又箱内し、灯火

を監視するにとどめた。

灯火を意識し始めてから7分くらいは経過したと思われる頃

突然、全く突然に、我々の顔面に2隻の宇宙船が

静止して、まかに光を放っている。コックピットの中も明るくな

顔も少々ぼてぼて感がある、高速移動したため、その慣性を

殺すための噴射なのか、顔前の一瞬に静止したまま

見事に動かない。3秒-7秒くらい経過し我々と同速で

定速運動に入ると、焰のような噴射はやみ、小さな円形の光

になった、なんと排気孔が大量に見えるではないか。

しかしながら中央部^分エンジン部の上下は見えない。

胴体中央部は時々、炭火がほねるような、光のマジックテープ

と圧石に飛ぶ、形は正方形、前方500-1000メートル

やや上を大至急、DC-8型程度の胴体くらい、無数に噴射孔がある。

その無数にある噴射孔が、時々バランスを保つためか、ある所の

噴射が強くなったり、弱くなったり、オートマチックにコントロールされて

いる様子である

危険と恐怖が全く感じられないから理由は、あまりにも突然の移動で

もしふらふら揺れたり、静止出来なかつたときは、非常に危険

我々は

を感じ、脱出のため移動していたであろう

が

410 km/h の速度で、木の枝の直前に突然出現してかつ静止した

状態では我々と飛行するに地球上の技術では不可能であろう

約3分~5分の間、位置のまま飛行を続けた後、2隻は

つらなって左方40度前方の方向に、水平位置よりやや上方に

移動していった。

この事はアンカレッジセンターには、通報してない。あつてはとられた

という方が正直であろう。

小型宇宙船が近づいていた10分ないし15分ぐらいの間、

VHF通信で、送信、受信、共に感度が非常に悪くなり

しばしばアンカレッジセンターとの間でのやりとりが乱れたが

去った後は、元の良好な状態に復活した。計器、航空機には

異常はない。何のために、あんなに近くまで接近したのか。

今もって理解出来ない。

飛去った方向に、再び今度はうす白いふらふらした灯火が

連なるように我々と、同高度、同方向、同速度で移動している

再びアンカレッジセンターと交信が始まる。10時の方向、同高度に

灯火が見えるが、レーダーでは見えないうか、どうか、

アンカレッジセンターからはレーダーには何も映っていないとの返答が来た

地上の大出力のレーダーで映らないのなら、機上用レーダーでは更に無理

だとは思ったが、目視している感じで、そんなに遠くはないと判断して

デジタルウェザレーダーを距離20マイル、レーダーの角度を水平位置

にセットした。スクリーン上に、灯火が見えている方向に距離

7ないし8マイル(13^{km}~15^{km})に大きな、緑色のまん丸の物体が

現われたではないか。アンカレッジセンターへ、機上用レーダーでは

10時の方向 7ないし8マイルに補足しているが地上でも補足出来

ないかと質したが地上からは全く補足出来ていないようだ、

機上用レーダーで航空機を補足する場合は通常、赤色で表示

される。機体の使用されている金属の種類が違うのだろうか、

アンカレッジセンターと交信している間に、まるで我々のやりとりが
(とアンカレッジセンター)

充分に解かっているかのように、徐々に2つの淡い青白い灯火が

左横 左はなめ後方30度へと移動して行くではないか。

真横付近でレーダーからは完全にその姿は消えたのである。

前方に位置していた時は水平位置に

やや高い高度と思われたが、今度は若干水平線の位置に

下の一番見えるらしい位置に降下した。中は目視でやはり「7-8マイル」程ある

フォートユークンに南下する頃、南西の空の夕焼け

が、^{見ながら}次第に赤みを帯び、^{2-3mm程度に}ほんの赤み(明り)が、東側はあ、^{見ながら}薄らぐ

の暗闇である。はるか前方には米空軍のアイリソン基地とフェアバンクス

の街の灯が徐々に、その明りを増してきた

あ、^{見ながら}一定の間隔で相伴してくる、一体、先刻 目前に

現われた 2隻の宇宙船なのか、暗くて、灯火だけで識別が

出来ない。

どうも、我々を水平線が「明り」部分に置いて、彼等はよめて

有利な位置で飛行しているようだ。

今迄のところは危険は感じなかったが、目的がなにか理解出来ない

ため不安の芽が若干頭をもたげはじめた。

アイリソン基地の灯りとフェアバンクスの灯りがかなりほろり輝きを

増してきたら、明りの帯の部分から北側(手前側)山を4、か

5、離れたと思われる地帯に突然大きな2つの明りが発せられた

ものは「く」明るいの、その灯火は、周囲の山の斜面に積った雪により
 いっそう輝を増している。何か地面を探るか、または何物か巨
 訪導するもりの灯火なのか

アラスカ上空の飛行はほとんど「昼間」が主であって、何の灯火
 なのか判断に迷う。宇宙船の基地なんぞという事はあるまい、それでい
 映画いかないか、何かあったはずだ。^{「それだ」}アラスカパイプラインが「走っている。
 輸送途中のガスステーションの火が、赤内得た。

12 アイルウィン 及び アバックス市上空に到達した、快晴であり、暗空に
 慣れた眼には 輝くばかりの明るさだ。なんという明るさか、
 頂度 明る、市街地上空にさしかかり、再び後方の位置にいる
 2 淡い白い灯火をチェックすると、なんとものぞい巨大な宇宙船が
 シルエットとして雲がわが上ったではないか。早く逃げなければ

27 アンカレッジセンター ^{ニラ JLI628} 右 45°に 変針を要求する、許可がくる迄
 の時間の長く感じられるとは、後方を再チェック、また「変ら可」に
 30 追いついてくる。ニラ JLI628 更に 45° 右に 変針を要求する、物体から
 離れるために。 JLI628 ニラ アンカレッジセンター、アドバイスある そのまま

360°旋回をしてはどうか。 JLI628 困難はう 360°旋回を急ぐ
 GA 02578 安全運航の祈りをこめて

オートパイロットハイブリッドモードでは旋回が遅いため、マニュアルモード
で 30度バンク右旋回 ^{に入ります} 右方向を監視する我々の進行方向

には灯火は見えない、離陸後かなと安心し、水平飛行に移り

再び後方を確認すると、今迄と同じ位置に飛行しているではないか

アンカレッジセンター-JL1628 物体は編隊飛行のように追ってくる

高度の変更を要求する、31,000フィート とうて 31000フィート

こちらアンカレッジセンター JL1628 31000フィートへ降下せよ

飛行中の燃費消費はほとんど計画通りであったが、残り燃料

約38000ポンド 逃げ遅れ 余裕はない、何かなんでもアンカレッジへ

何う以外はない、アンカレッジセンターこちらJL1628 トルキートへ

直行を許可せよ、 JL1628こちらアンカレッジセンター直行を

許可する、 再び後方をチェック 見事にひたりと直航して

降下しながら 定位置にあるではないか、何か目的なのか、不安が

よびます JL1628こちらアンカレッジセンター あなたは確信のため

スクランブルを要求するの アンカレッジセンターこちらJL1628 我々の

スクランブルを要求した、 ためらわずに迷わなかった

過去に確認のために飛んでいた米空軍の「ミスター」戦闘機が

不意に出来るとは出会っている最新鋭のF-15といえども、やはり知

れぬ。科学技術を持つ彼等に向って事故が起きないという保証はない。

31000フィートでトルキータンへ向う。やはり宇宙船は同じ

位置から発進しようとした。

11

J頂度 その3に アンカレッジを去ってフェアバンクスに向った UALの

旅客便が、我々と同じ管制区に移って来て、アンカレッジセンターと

12

交信を始めた。JL1628便の近くには何かいるらしいので確認を

してくれなさいか。高度はJLが31000^{フィート}なので33000^{フィート}を言ってみる

指示する全手順を待つと指示をしている。

20

どうやら宇宙船の上空を飛ばすらしい、我々は丁度マッキンレー山の

東側を飛行中である。UAL機が近づいて来た。

15

UAL機から位置を確認したいのでランディングライトの点滅を

するように要求され、互の位置を目視で確認した。

UAL機が

どんどん近づく。彼等も遠くから目と四のようにして

30

見ていく。UAL機が
真横を飛ぶとき、それまで定位置で

追いついた。宇宙船は、一瞬の間には消え去った。

GA-02578

安全運航の祈りをこめて

と同時に月の明りがまわり一面を明るく照らしはじめたのである

トルキータの北西75哩で、異常接角虫の幕は下りたのである

(アムカレッジより150哩(約276Km))

5 約50分の飛行であった。

同乗の仲間には可愛い、盛りの子供さんをおかえり、一家の主人であり

前途洋々たる人生が待ち受けている人達である。

10

本当に何事もおこらずよかったですと考えている次第である。

最後の幕切れは、^{山崎さん}作り話ばかりうまい具合に終りを告げたわけであるが

宇宙船の

15 今回のフライトは、目的がわからなため不安にはなつた。

一切危険を感じる事はなかつた。

皆平然といかか感じられたか。

20

遠い将来

私には人間が5百年か、千年後か、いずれは彼等と出会う、必ず

確認されることも原身って、こゝに11月17日の出会うと記録に残した。

25

30